

## 武家屋敷の時代

天正十八年(1590年)の家康江戸入府後に始まった近世都市「江戸」の開発によって、氾濫原のような状況は一変しました。平川を付け替えた後、泥炭層の上に盛土をし、武家屋敷が作られるようになりました。

最初旗本屋敷がいくつか作られ、次いで17世紀中頃には榊原式部大輔の屋敷となり、宝永三年(1706年)には松平讃岐守の上屋敷となりました。ただし17世紀後半までは、飯田町遺跡調査範囲の南半分は旗本屋敷であったようです。

榊原家は家康腹心の一人榊原康政を祖とし、上野國館林藩、陸奥國白河藩、播磨國姫路藩、越後國村上藩等を経て、寛保元年(1741年)以降は越後國高田藩に知行をえています。宝永三年当時は姫路藩でした。なお榊原家の家紋は源氏車です。

松平家は、水戸藩の祖徳川頼房の長子頼重を初代とします。寛永十九年(1642年)以降は讃岐國(香川県)高松藩十二万石の藩主となりました。宝永三年当時は三代目頼豊の時代でした。松平家の家紋は、三つ葵及び六つ葵です。

## 大火と大地震

江戸時代の遺跡を特徴づけるのは、大火や大地震といった大災害の跡です。それらの「片付け」と「再建」が、遺跡の内容の大枠を決定しているといつて、過言ではありません。飯田町遺跡に被害を及ぼした可能性のある災害は、明暦の大火(1657年)後に限ると36件ありました。このうち少なくとも、17世紀末か18世紀初めの大火(どれかは特定できません)、寛政四年(1792年)の大火、安政二年(1855年)の大地震は、飯田町遺跡に決定的な影響を与えたことが判っています。それらに伴う片付け遺構、すなわち廃棄物を埋めた穴から、時期的にも内容的にもまとまった、良好な遺物が大量に見つかっています。

## 理兵衛焼

寛政四年大火の片付け遺構と思われる「735号遺構」から、大量の陶磁器・近世土器・瓦に混じって、高松藩の御用窯であった理兵衛焼の一群が出土しました。国元にも類例の見あたらない特異な形態をしたものが多く、特注で焼かれたものでしょう。他にも837号遺構や716号遺構などから、茶碗や花生等の器種も出土しています。

理兵衛焼は初期京焼色絵陶器の流れをくみ、また他の材質の器物を焼き物で写す写象で知られています。正保4年(1647年)高松藩祖松平頼重に召し抱えられた陶工森島作兵衛重利を祖(ただし、代は2代)とし、慶安2年(1649年)以降高松の栗林荘北方に屋敷と窯を賜り、代々紀太理兵衛を襲名しながら現在に至っています。本遺跡出土品は2代重利(1649-1678)から8代惟晴(1813-1850?)にわたっていますが、鏡台等の異形陶器は5代惟久(1737-1792)頃の作品と思われる。裏面の刻印(「高」ないし「倉:破風高」)の特徴が、作陶時期推定の主な根拠となっています。

遺跡名 飯田町遺跡  
所在地 東京都千代田区飯田橋3-10(シニアワーク東京) 北緯35度41分48秒 東経139度45分11秒  
調査面積 4100㎡  
主な時代 縄文時代(早期・前期・中期)、古墳時代~奈良・平安時代、江戸時代、近代  
主な遺構 遺物集中(古墳時代~奈良・平安時代)、木樋、竹樋、継手、井戸、溜桶、穴蔵、廃棄坑、瓦溜、石組溝、木組溝、建物礎石・基礎杭(以上江戸時代)、木枠溝、転車台(以上近代)  
主な遺物 縄文土器、土師器、須恵器、土錘、肥前系陶磁器、京焼、理兵衛焼、中国磁器、瀬戸美濃系陶磁器、江戸在地系土器(かわらけ、焙烙、灯火具)、焼塩壺、玩具、瓦、砥石、煙管、銭貨、硝子製品、漆器、下駄、曲物、貝杓子

# 解説 飯田町遺跡

「シニアワーク東京」の敷地は、江戸時代は讃岐國高松藩松平讃岐守上屋敷の一部でした。屋敷地は明治になると陸軍省用地となり、明治28年(1895年)以降は鉄道用地となっていました(当初は甲武鉄道の飯田町停車場及び操車場-中央線の前身です)。その後国鉄はJRとなり、構内の一角は東京都の所有になりました。そして平成4年(1992年)から平成5年にかけて、当ビルの建設に先立つ事前調査として、埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。その結果、縄文時代早期から近代に至る、数千年に及ぶ当地の歴史の一端が明らかとなりました。

調査は東京都労働経済局と東京都住宅供給公社が協力し、東京都教育庁生涯学習部文化課指導の「飯田町遺跡調査会」を組織し、現地調査及び報告書作成を行いました。成果は報告書(飯田町遺跡調査会1995『飯田町遺跡』)にまとめられ、公共図書館等で閲覧することができます。

## 平川のほとりにて

飯田橋付近から下流の神田川の流れは、元和六年(1620年)に工事が着手された人工の掘割です。それ以前の神田川は平川と呼ばれており、飯田橋付近から南東に向かって流れていました。このあたりの事情は、正保年間の江戸図(1644年頃:→)と明治20年(1887年:↓)の地形図を対照することで確認できます。すなわち飯田町遺跡は、平川のほとりに立地した遺跡だったのです。



## 先史時代

最後の氷河期が終わると海面が急速に上昇し、縄文時代前半には、平川の谷は東京湾の奥まった入江となっていました。いわゆる縄文海進です。縄文前期の終わり頃になると海進のピークをすぎ、縄文時代後半は干潟のような状態であったと思われます。本遺跡では、縄文時代早期から中期にかけての縄文土器が出土しています。およそ7000年前から4000年前の時代に相当します。当地に集落が存在したかどうかは不明ですが、平川谷周辺の台地上に、縄文集落が多く営まれていたことは事実のようです。



次に遺物が見いだされるのは、古墳時代(4~7世紀)の初め頃から、奈良時代・平安時代にかけての時期です。多くの土師器(はじき)や須恵器(すえき)の破片が、3カ所のまとまりとなって発見されました。垂直分布をみると、平川右岸のゆるやかな斜面上に散布されていたようです。当時は平川の淡水の影響が強くなり、極めて低湿な沼地のような環境だったと思われます。